



普及版

吉川英治代表作

悠久の大自然と治乱興亡果てな

い大陸の歴史が育くんだ複

雑な中国の人と心。魏蜀呉

三国の覇権と政治の妙に学

ぶ生甲斐と身の処し方。改め

て日中文化の関連と我が人生と

はとを考える自戒の書。

# 吉川英治

# 三國志

十



吉川英治

三  
国  
志

第十卷 五丈原の巻

三国志 10巻 (全10巻)

---

昭和32年4月15日 初版発行

昭和62年10月30日 第71刷発行

著者 吉川英治

発行者 賀来壽一

発行所 株式会社 六興出版

東京都文京区水道2-9-2 〒112

電話東京(943)3431 振替東京 1-92448

印刷 図書印刷株式会社

製本 株式会社 明泉堂

落丁本、乱丁本はお取替えいたします

---

© 1957 Fumiko Yoshikawa, Printed in Japan

定価はカバーに明記してあります。

ISBN 4-8453-0210-1 C0093

目

次

|              |    |
|--------------|----|
| 中原を指して……………  | 三  |
| 美丈夫姜維……………   | 一七 |
| 祁山の野……………    | 三二 |
| 西部第二戦線……………  | 四一 |
| 鶏家全慶……………    | 五一 |
| 洛陽に生色還る…………… | 五八 |
| 陣中に戯言なし…………… | 六三 |
| 高楼弾琴……………    | 七三 |
| 馬謖を斬る……………   | 八二 |
| 髪を捧ぐ……………    | 九一 |

二次出師表……………九八

二度祁山に出づ……………一〇八

食……………一一七

總兵之印……………一二九

司馬仲達計らる……………一三六

天血の如し……………一四一

長雨……………一四八

賭……………一五三

八陣展開……………一六二

竈……………一六七

|                  |             |             |                  |             |                  |                  |             |                       |             |
|------------------|-------------|-------------|------------------|-------------|------------------|------------------|-------------|-----------------------|-------------|
| 女<br>衣<br>巾<br>襖 | 水<br>火      | 七<br>盞<br>燈 | 豆<br>を<br>蔣<br>く | ネ<br>ジ      | 木<br>牛<br>流<br>馬 | 具<br>眼<br>の<br>士 | 木<br>門<br>道 | 北<br>斗<br>七<br>星<br>旗 | 麦<br>青<br>む |
| 二<br>三<br>七      | 二<br>二<br>八 | 二<br>二<br>一 | 二<br>一<br>六      | 二<br>〇<br>八 | 二<br>〇<br>一      | 一<br>九<br>二      | 一<br>八<br>四 | 一<br>七<br>七           | 一<br>七<br>二 |

銀河の禱り……………二四七

秋風五丈原……………二五四

死せる孔明・生ける仲達を走らす……………二六三

松に古今の色無し……………二七三

### 篇外余録

諸葛菜……………二七八

後蜀三十年……………二九三

魏から—晋まで……………三〇七

五丈原の巻



## 中原を指して

### 一

蜀の大軍は、沔陽（陝西省・沔陽・漢中の西）まで進んで出た。ここまで来た時、

「魏は関西の精兵をもつて、長安（陝西省・西安）に布陣し、大本營をそこにおいた」

という情報が的確になった。

いわゆる天下の峻、蜀の棧道をこえて、ここまで出て来るだけでも、軍馬は一応疲れる。孔明は、沔陽に着くと、

「ここには、亡き馬超の墳がある。いまわが蜀軍の北伐に遭うて、地下白骨の自己を嘆じ、なつかしくも思っているだろう。祭りを営んでやるがよい」

と、馬岱を祭主に命じ、あわせてその期間に、兵馬

を休ませていた。

一日、魏延が説いた。

「丞相。それがしに、五千騎おかし下さい。こんな事をしている間に、長安を潰滅してみせます」

「策に依つてはだが……？」

「このこと長安の間は、長驅すれば十日で達する距離です。もしお許しあれば、秦嶺を越え、子午谷を渡り、虚を衝いて、敵を混乱に陥れ、彼の糧食を焼き払いましょう。——丞相は斜谷から進まれ、咸陽へ伸びて出られたら、魏の夏侯楙などは、一鼓して破り得るものと信じます」

「いかなあ」

孔明は取り上げない。雑談のように軽く聞き流して、「もし敵に智のある者がいれば、兵をまわして、山際の切所を断つにきまっている。そのとき御辺の五千の兵は、一人も生きては帰れないだろう」

「でも、本道を進めば、魏の大軍に対して、どれほど

多くの損害を出すか知れずまい」

孔明はうなずいた。そのとおりであると肯定しているもののごとくである。そして彼は彼の考え、とり軍を進ませた。隴右の大路へ出でて正攻法を取ったものである。

これは、魏の予想に反した。孔明はよく智略を用いるという先入観から、さだめし奇道を取って来るだろうと信じて、他の間道へも兵力を分け、大いに備えていたところが、意外にも蜀軍は堂々と直進して来た。

「まず、西羌の兵に、一当て当てさせてみよう」

夏侯楙は韓徳を呼んだ。これはこんど魏軍が長安を本営としてから、西涼の羌兵八万騎をひきいて、なにか一手黥せんと、参加した外郭軍の大将だった。

「鳳鳴山まで出で、蜀の先鋒を防げ。この一戦は、魏蜀の第一会戦だから、以後の士気にも関わるぞ。充分、功名を立てるがいい」

夏侯楙に励まされて韓徳は勇んで立った。

彼に四人の子がある。韓瑛、韓瑤、韓瓊、韓琪、みな弓馬に達し、力衆に超えていた。

「八万の強兵、四人の偉児。もって、蜀軍に一泡吹かすに足るだろう」

自負満々、彼は戦場へ臨んだが、なんぞ知らん、これは夏侯楙が、なるべく魏直系の兵を傷めずに、蜀の先鋒へまず当てさせた試しに乗ったものとは覺らなかつた。

望みどおり蜀軍の先鋒と、鳳鳴山の下で出会ったが、その第一会戦に、韓徳は四人の子を亡てしまった。

そのあいては、蜀の老将趙雲であつた。

長男の韓瑛が、

「趙雲を見た」

と、軍の中で告げたので、四子を伴つてその首と、追撃してまわるうち、やがて趙雲の方から駒を回して来て、

「豎子。望むのは、これか」

と、一槍の下に韓瑛を突き殺した。

韓瓊、韓瑤、韓琪が三方から、

「老いぼれ」

と、挾撃したが、またたく間に、韓瓊、韓琪も討たれ、趙雲は悠々引き揚げて行つた。

ひとり残つた韓瑤は、急に追いかけて、そのうしろから斬りつけたが、趙雲は身をそばめて、韓瑤を馬の鞍へひき寄せ、

「ああ、殺すも飽いた」

と、こんどは、引つ摺んだまま、生け捕つて帰つてしまった。

父韓徳は、心も萎え、大敗して、長安へ逃げくずれた。

## 二

鄧芝は、きょうの勝ち戦を賀したのち、趙雲に言つた。

「お齡もすでに七旬を越されているのに、きょうの戦場で三人の若い大将を討ち、一人の大将を生け捕つて来られるなど、まったく壮者も及ばぬお働き、実に驚き入りました。……これでは成都を立つ前に、丞相が留守へ廻そうとしたのに対して、御不満を陳べられたのも無理ではありません」

趙雲は快然と笑つた。

「いや、その意地もあるので、きょうは少し働いた。しかしこんな程度を功として安んじる趙雲ではない。まだまだ腕に年は老らないつもりだ」

鄧芝は、つぶさに戦況を書いて、まず序戦の吉報を、後陣の孔明へ急送しておいた。

それに反して、魏の士気はそそけ立った。わけて都督夏侯楙は、

「韓徳が一敗地にやぶれたのを見ても、これはやや敵を軽んじ過ぎた。大挙して、彼の先鋒を打ち挫かぬ分には、蜀の軍を勝ち誇らせる惧れがある」

と、自身、長安の營府を離れ、大軍を擁して、鳳鳴山へ迫った。

彼は美しき白馬に跨がり、燦爛たる黄金の盔をいただき、まことに魏帝の従兄弟たる貴公子的な風采をもつて、日々旗の下から戦場を見ていたが、常に、敵方の老将趙雲が、颯爽と往来するのを見て、

「よし、あしたは予が出て、あの老いぼれを討ちとめてみせる」と大言した。

うしろに居た韓徳が、

「とんでもない事です。あれはそれがしの子を四人も討った老子龍です。常山の趙雲です。何で、お手におえましょう」

「そちの子を四人も討たれたというか。ではなぜ親のお前は見ているのだ」

韓徳は、さし俯向いて、

「機会を窺っているのですが」  
ひどく辱入った容子をした。

翌日の戦場で、韓徳は大きな斧をひきつけて駆け巡っていた。そして、趙雲と行き合うやいなや、名乗りかけて、一戦を挑んだが、十合とも戦わぬまに、趙雲の槍さきにかけられてしまった。

副将鄧芝も、趙雲に負けない働きをした。わずか四日間の合戦で、夏侯楙の軍容は、半身不随になりかけて来た。夏侯楙は頽勢を革めるために、総軍を二十里ほど後退させた。

「いや、実に強いものだ」

夏侯楙は軍議の席で、まるで他人事みたいに趙雲の武勇を賞めた。魏帝の金枝玉葉だけあって、大まかというのか、なんというのか、諸将は彼の顔をながめ合っていた。

「いや、ほんとに強い。むかし常陽の長坂橋で、天下に鳴らした豪勇は、とくに予も聞いていたが、いくら英雄でも、年すでに七旬の白髪だ。あんなではあるまいと思っていたが、韓徳の大斧も彼に遭っては用を

なさなかつたところなど見ると、げに怖るべき老武者だ。蜀の先鋒を砕くには、まず彼を仕止める計からさきに立てなければなるまい」

熟議は、それを中心とした。

計策ととのつて、魏軍はふたたび前進を示した。それを迎えて、

「乳臭児夏侯楙を一つかみに」と、趙雲は一陣に駆け向かうとした。

鄧芝は、諫めて、

「すこし変ですぞ」と、止めたが、趙雲は、猪突してしまった。

向かうところ敵なき快勝は獲たが、さて顧みると、退路は断たれていたのである。すなわち、この日魏軍は、神威將軍董禧、征西將軍薛則の二手に、各々二万騎を付して、ふかく潜んでいたのだった。

味方の鄧芝とも別れ、部下とも散り散りになり、趙雲は日の暮るるまで、敵に趁われ、矢風に追われ、な

お包囲から脱することができなかった。

高き丘に、夏侯楙の旗手が立って居て、彼が西へ奔れば西へ旗を指し、南へ駆ければ南へ旗を指していたのである。

「ああわれ老いに服せず、天ついに、ここに死を下し給うか」

駒も疲れ、身も疲れ、趙雲は仆れるように、樹下の石へ腰をおろした。

そしてさし昇る月を仰いで独り哭げいた。

### 三

たちまち、石が降って来た。雨とばかりに。

大岩がごろごろ落ちて来た。雪崩かとばかりに。

「敵か」と、趙雲は、息つく間もなく、ふたたび疲れた馬に鞭うって奔った。

すると月明の野面を黒々と一彪の軍馬が殺奔して来る。白き戦袍に白銀の甲は、趙雲にも覚えのある大将

である。彼はわれをわすれて、こちらから手を振った。

「おいッ。張苞ではないか」

「やあ、老將軍ですか」

「いかにしてこれへは？」

「丞相の御命です。過日、鄧芝から勝ち軍の御報告があるや否や、危うしとばかり、すぐ吾々に救急の命を發しられましたので」

「ああ、神察。して、貴公が左の手に持つその首級は」

「これへ来る途中、擊破して打ち取った魏の大將薛則の首です」

月光へさしあげて、莞爾とそれを示している所へ、更に、反対の方角から、一軍隊が疾風のように馳せて来た。

「や、魏軍か」

「いや、いや関興でしょう」

待っていると、果たして関興のひきいる一軍だった。

父関羽の遺物の青龍刀を横さまに抱え、鞍には、彼もまた、一首級をくくりつけていた。

「老將軍を援けんため、これへ来る途中、前を阻めた魏兵を蹴ちらし、その大將董禧という者の首をもらって来ました」

「やあ貴様もか」

「御辺もか」

ふたりは、二つの首を見せ合って、月下に阿々と大笑した。

趙雲は、涙をたたえて、

「頼もし頼もし。この老骨の一命など、さしたる事ではない。董禧、薛則の二將が討たれたりと聞こえれば、敵勢の陣はまさに潰滅状態であらう。その虚をのがすべきでない。われに関わらず御辺等は、崩るる魏軍を追って、更に、夏侯楀の首をも挙げ給え」と、励ました。

「さらば」

「御免」

と、ふたりは、手勢をひきつれて、まっしぐらに駆け去った。

趙雲は、あと見送っていたが、

「ああ大きくなったなあ。張飛も関羽も地下で満足しているだろう。思えば、あの二人はわしにとつても甥のようなものだ。時代は移って来た。国家の上将なり朝廷の重臣たる自分も、老いてはやはりあの若者たちにもかなわない。辱すべきだ。よい死に場所こそ欲しいものよ」

彼もまた、やがて鞭うって後に続き、なおその老軀を、追撃戦の中に働かせていた。

副将鄧芝も、いずこからか現われて来て、それに加わり、一時散り散りになった蜀兵も、この好転に、こかしこから旗をあげて集合して来た。

夜明けから翌日にかけても、魏軍は止まることを知らず敗走しつづけた。

夏侯楨は一支えもできなかった。父夏侯淵とはあま

りにも似ない貴族らしさを多分に持った彼とその幕下は、逃げ崩れてゆく姿まで絢爛だった。そして南安郡（甘肅省・蘭州の東）の城中へ入り、これへ諸方の大軍を吸って堅固を恃んだ。南安は著名な堅城である。日ならずして、続々これへ寄せて来た趙雲、関興、鄧芝、張苞などは、四方を囲んで力攻めしたが、昼夜十数日の喊声も、その石垣の石一つ揺るがすことはできなかった。

孔明は、のち、ようやくこれへ着陣した。

その軍勢も多くなかった。

これへ臨む前に、沔陽にも、陽平にも、石城方面へも、軍を頒けて、自身はその中軍だけを率いて来たからである。

「自分が来てよかった。もし皆に委せておいたら、魏はかならず別に行動を起こして、一面に漢中を衝き、一面寄せ手のうしろを取るだろう。あやうく御辺等の軍と中軍とは、両断されるところであった」